

甲状腺外科草子 77

金属カメラの貫目

杉野 圭三

その筋の業界では、貫禄のある「親分」のことを「貫目がある」と表現するようである。カメラ業界でもプラスチック製カメラは軽くて取り扱い容易だが質的評価は低い。

最近ではスマホで写真を撮る者が殆どで、高齢者も例外ではない。デジカメも一眼レフが少数派となりミラーレスへと変遷している。まして、今やフィルム式のカメラで撮影する人間は絶滅危惧種となっている。

20-30年前には中古カメラブームがあり、専用雑誌も数多く発売されたものだが、現在はカメラ雑誌自体が姿を消した。名門「アサヒカメラ」も廃刊となり寂しい限りだ。

小生も断捨離でカメラの大部分を整理したが、まだ残っているものがある。

最初に中古カメラ屋で一目ぼれしたのがライカ III f である。手に取るとすっぴり入る大きさだが、金属の塊のような重量感に驚いた。



ライカ III f (1950), コニカヘキサノン 50mm, f 2.0

ライカ III f (1950) はオスカー・バルナックの開発したバルナックライカの完成型といわれ、昔は家一軒分の価格と言われた。ファインダーも見やすく、シャッターも軽快、無駄のないスタイルで一時期を席卷した名機である。フィルム巻き上げはダイヤル式だが、慣れれば以外と軽快だと感じる。この型はセルフタイマーなしの形式である。当時バルナック型の人気は低く、価格もお手頃であった。

一度ライカの魅力に引き込まれた人間は必然的に M 型ライカへと導かれる。

1954年にカメラ業界を騒然とさせたのがラ

イカ M3 の登場であった。バルナック型のファインダーを改善し、スクリューマウントも独自の M 型マウントへ変更、巻き上げレバーなどレンジファインダーカメラの完成形へと進化させたものである。残念ながらフィルム装填は以前の難しい形式のままである。



ライカ M3 (1954), DR ズミクロン 50mm, f 2.0

M3 の発売年度は奇しくも自分の誕生日と同じで、購入に迷いはなかった。この機はダブルストローク形式(2回巻き上げ)である。



左：コニカ IIIA, 48mm, f 2.0, (1958)

右：トプコンユニレックス, 50mm, f 2.0, (1969)

日本にもドイツ以上に面白いカメラがある。コニカ IIIA は独自のパララック補正機構、明るくやや黄色いファインダーで視野率 100%, ピント合わせが極めて容易な優れものである。レンズは 48mm, f 2.0、コニカのヘキサノンレンズは定評があり解像度は素晴らしい。

トプコンユニレックスは東京光学のレンズ交換式のレンズシャッター機。この形式なら静かなシャッターを想像するが、シャッターを切った時の衝撃の激しさには驚く。これだけの衝撃があればブレブレになるのではないかと危惧するレベルである。

実際に撮影することはなくなったが、重量感と空シャッターを切る時の快感がたまらなく、未だに手放せない相棒たちである。

断捨離にはまだまだ到達できそうにない。

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2023年10月13日